

全科協

vol.47 *News*
NO.4

平成29年7月1日発行 通巻第275号

特集

第24回研究発表大会より
「地域の核となる博物館 ～それを実現する資質能力」

JCSM
Japanese Council of Science Museums Newsletter

全国科学博物館協議会

〒110-8718 東京都台東区上野公園7-20 国立科学博物館内
TEL 03-5814-9863 FAX 03-5814-9898
<http://jcsm.jp>

CONTENTS

- P2 ▶ 特集
- P10 ▶ 海外博物館事情
- P12 ▶ 7月8月の特別展等
- P14 ▶ リニューアル情報

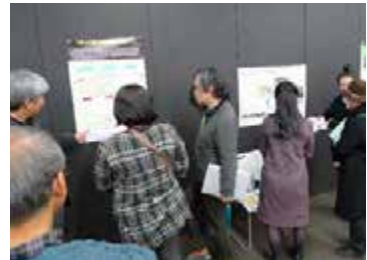
地域の核となる博物館～それを実現する資質能力

平成29年2月17日、第24回研究発表大会が京都鉄道博物館を会場に開催され、121名の参加者がありました。

今回の研究発表大会では、最初に京都鉄道博物館の遠山由希子氏に「地域と歩む鉄道文化拠点」と題して講演いただき、次に、2019年開催予定のICOM京都大会を見据え、「ICOM国際委員会への参加のススメ」と題し、国立科学博物館の小川義和氏、兵庫県人と自然の博物館の三橋弘宗氏、吹田市立博物館の五月女賢司氏に国際委員会参加経験などについて講話いただきました。

その後の分科会では、「地域の核となる博物館～それを実現する資質能力」をテーマに16件の口頭による事例発表が行われました。講演内容、事例発表内容につきましては、冊子資料として各加盟館園の皆様にお配りしていますので、本号ではポスターセッションの発表を中心にをご紹介します。

館種や規模など加盟館園の多様性が表れた事業事例になりましたが、皆様の館運営のお役にたてば幸いです。



(各所属は大会開催時のもの)

地域の核となる博物館～それを実現する資質能力～

千葉市科学館／日本サイエンスコミュニケーション協会 高安 礼士

1 はじめに

科学博物館の約30%が指定管理者制度を導入し（科学系博物館における「サイエンスコミュニケーション」活動の実態アンケート調査，SC協会，2014）、経営主体と運営を支える人材はますます多様なものとなって、理系のバックグラウンドや学芸員資格を持つ者が科学館等で働く比率は減っている。また、本大会に先立つICOMミラノ大会のテーマは「博物館と文化的景観」であったが、その基調講演等で「文化創造の原動力としての博物館」という言葉が数多く聞かれた。それらを受け、第24回大会では、地域の文化創造の核となる博物館の運営とそれを支える人材の在り方を考えることがテーマとして設定された。

「Museum Careers and Training: A Professional Guide」(Victor J. Danilov, GREENWOOD PRESS, 1994)によれば、博物館職員の育成や研修はその博物館の経営構造と館の種類、規模、設置場所、設置方法、設置の目的、運営方法などによって異なるものである、と述べられている。また、アメリカにおいては様々な法令や基準に従って博物館経営が構造化される、とも述べられている。日本におい

ては、博物館法に基づく登録博物館はその意義を維持しつつも、良い意味での様々な設置や運営方法が広く行われ、そこで働く人材においても多様性を獲得していると判断することもできよう(平成20年及び25年度「博物館総合調査」)。

ここでは、文化創造の恒久的の機関として地域の核となる博物館を実現するためには、どのような運営とそれを支える人材はどのように育成されるべきかを論じたい。

2 様々な工夫と提案

本研究大会ではいくつかの直接的な提案もあった。千葉県立中央博物館の新氏からは、研究を主体とした自然史博物館を例として、地域の核となるべき方策とそれを遂行するための職員の能力資質に関する提案があった。また、千葉市科学館の森井氏からは「科学フェスティバル」を例にして職員の資質と育成に関する提案があった。「平成25年度博物館総合調査」でも述べられているように、科学博物館（自然史博物館・理工博物館・動植物園・水族館など）では、指定管理制度の導入率が高く、展示活動と教育普及活動を重視し、また水族館・動物園ではレクリエーション活動を重視している回答があり、本研究発表でもその実態に即し

た発表が多く行われた。また、今回は特に特別支援学校や放送局などのメディア、大学などの研究機関との連携などに関する科学館特有の事例報告が数多く行われ、それに関連した職員の資質・能力に関する提案があった。

最近では、これにITに関連したSNS関連事業や大学をはじめとする研究機関等との連携やそれらが複合された実践事例が一般的によく見られる。これらの事業は有能な一職員によって実現できる事例でもあるが、機関同士の連携という観点からは組織的な処理が必要で、管理職や設置者を巻き込み、場合によっては設置者が主体的に動かなければならない場合も多い。今回の事例報告の中にも、当該事業やそれに先立つ事業が科研費や各種団体の資金援助を受けて実現したものもあった。つまり、様々な事業展開には管理者や設置者の理解と支援がなければ実現できない場合も多く、そのため事業遂行の担当者のみならず館長を含む管理者や設置主体の博物館に対する理解、すなわちミュージアムリテラシーの重要性とその具体的展開の必要性が認識された。

3 科学博物館におけるミュージアムリテラシー

ミュージアムリテラシーとは「博物館を利活用する能力」とされ、主に博物館利用者に関して言われている概念であった。ところが最近では、この言葉の持つ「上から目線」的なところが反省され、博物館職員やその管理者、さらにはその設置者にも求められるものとなってきた。

博物館の運営は、そのミッションとそれを実現するための機能、その機能を支える組織によって成り立っている。地域の文化環境や設置主体の考え方などによって博物館は各々異なるミッションと組織を持つことになるが、今日では利用者第一主義の運営が求められており、そのための事業計画やサービスが最優先される。しかし非営利の文化施設としての博物館であるので何らかの共通の方法があるはずである。それは博物館としての5大機能である「調査研究」「収集保存」「展示」「教育普及」「リクリエーション」のど

れをも疎かにせず、バランスをとって運用していくこと、すなわちミュージアムリテラシーに配慮した取り組みが求められるといえる。

特に科学博物館における教育普及事業は、最新の科学技術の動向と科学の基礎原理に関する知識・技術の習得や社会課題に関連したテーマを設定し、サイエンスコミュニケーションの手法である「つながる、深める、つたえる、実践する」を用いて、

- 1) 科学に関する知識や概念を知るための活動
- 2) 科学のプロセス（科学的方法）とその応用を深める活動
- 3) 得た知識や経験を友人や家族及び社会に伝える活動
- 4) 知識や経験を生かして、実際に制作・創造する活動として実践することが「科学博物館におけるミュージアムリテラシー」として期待されている。

表-1 博物館関係者が持つべきミュージアムリテラシー

大分類	中項目	小項目
博物館の成り立ち	ミュージアムの概念	博物館の理念 博物館の機能
	設立と運営	設立 マーケティング 組織と人材 事業運営 施設管理・危機管理
コレクション・マネージメント	ミュージアム資料論	コレクション・ポリシー 地域の資産と文化遺産
	資料の活用	展示とメディア ミュージアムショップ 地域おこしと資料の活用
コミュニケーション&リレーション	コミュニケーション理論	コミュニケーション各論
	展示	展示デザインと運用
	教育普及（コミュニケーション）	博物館教育論
	連携	パブリシティ（広報） アクセスビリティ（利用便益） 市民参画
時代が求める姿	サービス	友の会・ボランティア
	社会の新しい流れ	高度情報社会と新ミュージアム 地域おこしとミュージアム
	新しい博物館像	今後のミュージアム像

奈良県を中心としたオオサンショウウオの生息調査

橿原市昆虫館 主事 野川 裕司

はじめに

本大会のテーマは「地域の核となる博物館～それを実現する資質能力」であった。「地域の核となる博物館になるためにはどうすれば良いのか」非常に難しいテーマである。さ

らに「それを実現するための資質能力とは」と考えた時、橿原市昆虫館は奈良県にある唯一の自然史系博物館であること。また、調査研究機関として登録していることを活かして「自然」と「地域」を紡ぐ架け橋になることだと考えた。これを

実現するための方法として、様々な調査や保全活動、研究を行ない展示物へ還元していくことが重要である。例えば、調査に基づき得た情報を特別展で紹介したり当館のイベントとして保全活動（ホタルの再生）を地域の人たちと行なうなどの取り組みを実施している。本報告では、調査活動の1つであるオオサンショウウオの生息調査について紹介する。

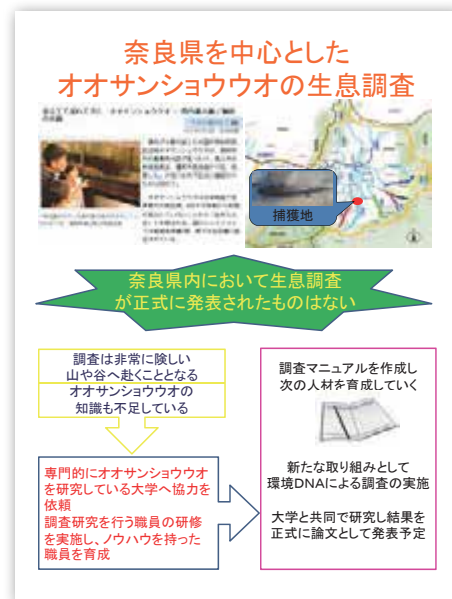
調査について

平成24年度に、奈良県内では最大級のオオサンショウウオが奈良県御所市の農業用水路で発見された。奈良県内でもオオサンショウウオは生息が確認されていたが、上記個体の発見された水系では初確認であった。このことから、正確な生息調査が行なわれていない奈良県を中心としたオオサンショウウオの生息調査を行なうことになった。平成25年度から平成27年度にかけて、山間部を中心に調査を行なった。夜行性であるオオサンショウウオを発見するために主に夜間の調査を行ったが険しい場所が多く調査は難航し、継続的に調査したが発見には至らなかった。しかし、地元の方に聞き取り調査を行うと見たことがあるなど、有力な情報がいくつか確認された。今後は、別の方法としてオオサンショウウオの調査研究を行う大学と協力し、環境DNAによる調査も行なう予定である。

まとめ

上記調査で得られたオオサンショウウオの情報や調査結

果について、特別コーナーを設けて紹介している。このように調査や研究を行なって終わりではなく、そこで得たものをいかに上手く還元していくのが重要になってくる。現状は、特別展やパネル展示などを行なっているが、もっと別の方法でも還元していくことが出来るのではないかと考えている。常に新たな情報を発信し続けることで「地域」にとって欠かせない存在になり、同時に「自然」にとっても欠かせない存在になると考える。両者の共存を実現するための架け橋として今後も精力的に活動を行なっていきたい。



【複合施設を生かした展覧会】カガクのトビラ「ふしぎなかがみ～わたなべちなつ絵本展～」

大垣市サイトピアセンター 早崎 由起

1 はじめに

大垣市は、古くから東西交通の要衝として栄え、地下水が豊富で、「水都」と呼ばれてきた。この水都に由来する大垣市サイトピアセンターは、水について学ぶ科学館や、SL

の保存展示も行うこともサイエンスプラザ、プラネタリウムやアートギャラリー、音楽ホールなど、科学や美術・音楽を含む複合教育文化施設で、多彩な事業を展開している。

なかでも複合施設の特徴を生かした展覧会として、科学

ここを動かす空間をつくりあげるために。
調査・企画、デザイン・設計、制作・施工、運営



空間創造のプロフェッショナル 株式会社 丹青社
〒108-8220 東京都港区港南1-2-70 品川シーズンテラス19F
TEL|03-6455-8100(代表) URL|www.tanseisha.co.jp
札幌・仙台・新潟・名古屋・大阪・福岡・那覇・北京・上海

TOKYO SCIENCE CO., LTD.

ミュージアム・ショップ向/教育用地球標本



地球標本/化石・鉱物・岩石
古生物/レプリカ・復元模型
恐竜復元モデル

◆常設ショールーム：紀伊國屋書店・新宿本店1F TEL.03(3354)0131(代表)◆
Fossils, Minerals & Rocks TEL.03-3350-6725 FAX.03-3350-6745
株式会社 東京サイエンス http://www.tokyo-science.co.jp
E-mail:info@tokyo-science.co.jp
〒151-0051 渋谷区千駄ヶ谷5-8-2 イワオ・アネックスビル
Practical Specimens for Study of Earth Science

の不思議を身近に体験しながら学ぶ展覧会「カガクのトビラ」シリーズを2014年より開始し、平成28年度は、鏡の反射を使った絵本を紹介する展覧会を開催した。

2 サイエンス×アート

恒例事業となっている手作り絵本を紹介する美術系展覧会「うまれる絵本展」と同時開催し、子どもたちになじみ深い絵本と「鏡」の不思議な世界を同時に体験する場を提供し、反射の仕組みから科学への興味関心を高める機会とした。また作家作品と展覧会初日の作家によるワークショップで参加者が協同制作した作品を展示した。この様な複合施設の機能を生かした取り組みの結果、来場者は、例年に比べて倍増した。

3 ワークショップ

世界に1冊の鏡の絵本を13組の家族が各々1ページを作成し、参加者全員で力をあわせて作りあげた。作家の考えた物語にあわせて、参加者たちは、絵としかけを考え1ページを作る。結果、13ページすべてが個性的でオリジナリティあふれるものになった。最後に、全員の作品をあわせて、1冊の絵本にし、作家が読み聞かせを行った。できあがった作品は、館内に約1か月間展示した。

また、独自のワークショップとして、ふしぎなかがみ×うまれる絵本展「不思議なカードを作ろう」を行い、アクリル絵の具を使って作ったオリジナルの色紙を使って反射のカードを作り、発表会を行った。参加者は、鏡のツリーに飾り付けも行い展示した。

4 展覧会

鏡による反射のしかけを使った体験型展覧会である。メイン作品は、高さ180cmの大型絵本で、来場者がページをめくり、鏡に映り込むことで、自分自身が絵本の世界に入り

込むかのような不思議な体験をしたり、開く角度を変えることで奥行き感の変化を楽しめるものであった。中でも子供たちに人気があったのは、オリジナルの『ふしぎなにじ』を作る作品で、虹色のマグネットを鏡面に貼ったりはがしたり、鏡の開く角度を変えたりしながら、思い思いの絵を作り、何度も繰り返し挑戦していた。

あわせて、ワークショップで作成した作品の展示を行った。この展示期間のみ1冊の「絵本」として見る事ができる作品となった。

5 おわりにー博物館の社会的役割

この事業を通して、全員が揃わないと1冊の絵本が完成しないという、何事も一人ではできないという経験や、コミュニケーションや社会性を考えるとともに、科学を、より身近に感じ楽しむ機会を提供した。また、当財団にとっても作家とのつながりができ、当館のこどもサイエンスプラザに常設展示物として作品を設置した。

博物館としての収集・保存、調査・研究、公開・展示、教育という役割だけではなく、複合施設の機能性を生かし、公共の教育文化施設として、社会包摂的な役割も果たしていきたい。



「ヨソの館」から「オラの館」へ

豊橋市自然史博物館 安井 謙介

はじめに

地域を学ぶ拠点として住民に博物館を活用してもらうには、地域の情報や資料が博物館に絶えず集積されなければならず、それらを有する住民や団体との協力が不可欠である。特に職員数が少ない市町村立の小～中規模館では、学芸系職員が庶務的業務をこなしつつ、自らの専門分野以外の多岐に渡る分野をもカバーしなければならぬため、彼らの協力をいかに得られるかが博物館活動の命運を握っていると

いっても過言ではない。

地域の情報や資料を有する住民や団体の協力を得るには、彼らを積極的に博物館活動へ巻き込み、博物館が敷居の高い「ヨソの館」では無く、「オラの館」であると認識してもらわなければならない。それには、彼らに対する学芸系職員を含む館職員の意識変革、そして彼らを迎え入れる制度の整備とその柔軟な運用が必要である。本報告では、これら取り組みを実施し、住民とともに博物館活動を展開して

いる当館の事例を紹介する。

敷居が高かった？豊橋市自然史博物館

豊橋市自然史博物館は、1988年に開館した自然史系の中規模館である。当館のテーマである「地球・生物の歴史」と「郷土の自然」に関する地域住民の理解に寄与すべく、開館以来館を挙げて努力を行ってきた結果、これまで入館者数や収蔵資料点数は概ね順調に推移してきた。一方で、地域で自然史分野の活動を行っている住民や団体との連携は、学芸員が彼らとの繋がりを持つことに積極的でなかったことや、彼らが博物館施設を気軽に利用することが制度上困難であったことから、必ずしも順調であったとは言えず、そのため彼らにとって当館は敷居の高い「ヨソの館」であった。その結果、彼らが持つ地域の情報や資料の博物館への集積は進まず、地域を学ぶ拠点として当館が十分に機能していたとは言いがたい状況であった。

「オラの館」へ

この状況を改善するため、筆者らは先ず現状を理解した上で博物館活動に協力してくれる住民を見出し、共同調査の実施等を通じて個人的な信頼関係を結ぶことに取り組んだ。信頼関係の醸成後、その住民の知人や彼らが属している団体へも積極的に接触し関係を深めることに努め、博物館活動に彼らの協力が不可欠であることを事ある毎に訴えた。そして、博物館活動に気軽に関与してもらうため、既存のボランティア制度を活用し、比較的自由に博物館施設を利用することが可能な身分であるボランティアとして活動してもらった。並行して、彼らの活動成果を数値（収集資料数や標本作製数、普及行事の参加者数等）で他の館職員に絶えず提示し、彼らがいかに博物館活動に貢献しているかの周

知を図った。実績が積み重なるにつれ、彼らが博物館活動を進める上で重要なパートナーであるとの認識が館職員に広がっていった。一方、博物館活動への関与が進むにつれ、彼らの館に対する認識も「ヨソの館」から「オラの館」へと変化すると同時に、彼らが持つ地域の資料や情報が館に集積されるようになった。その結果、当館は集積した地域の情報や資料に基づいて地域を学ぶことができる、真に地域に根付いた博物館へと変貌を遂げつつある。

まとめ

地域を学ぶ拠点として博物館が十分に機能するには、地域の資料や情報を有する住民や団体との連携が不可欠である。そのためには、博物館活動を進める上で彼らは重要なパートナーであるとの認識を、学芸系職員を含む館職員は共有しなければならない。それと同時に、彼らが博物館活動に関与し易くするための制度を整備（または既存の制度を活用）し、それらを柔軟に運用していかなければならない。



多様なニーズに対応するためのアウトリーチ事業の実施 -移動博物館を中心に-

ミュージアムパーク茨城県自然博物館 潮田 好弘

ミュージアムパーク茨城県自然博物館（以下当館）は、茨城県南西部に位置している。宇宙の進化と地球の生いたち、自然と生命の不思議な営みについて展開するストーリー性のある本館展示と、茨城県最大の自然環境保全地域である菅生沼に隣接した雑木林・谷津田など里山環境を合わせ持つ15.8haに及ぶ広大な野外施設を有している。

当館では、地域の教育力活性化の核となるべくさまざまな教育普及活動を実践している。そのなかでも、当館に来館することが困難な人々や現地での博物館活動を必要とする

人々を対象に、当館が直接的あるいは間接的に交流するアウトリーチ事業を展開している。アウトリーチ事業には、「教育用資料の貸出」・「講師派遣」・「移動博物館」があり、これら事業により、生涯学習社会における博物館利用の実質的な機会均等を図るとともに、県民に博物館に対する理解を深めてもらうことにより、当館の利用度を高めている。

教育用資料の貸出では、県内の学校等に、各学校では準備が困難な標本などを提供している。積極的な広報により順調に貸出件数が伸びているが、学校の授業進行の関係か

ら、昆虫標本や化石レプリカの型等、同時期に特定の資料に需要が集中する傾向が認められる。今後、需要が集中する教育用資料の整備と新規の貸出資料を増やしていきたい。講師派遣では、学校・生涯学習施設での講演などの要請に対し、当館職員を派遣し、専門的な知識や能力・資料等を広く提供している。指導者育成のための研修会、一般向けの観察会や連続講座等への派遣依頼など、自然博物館の学芸員を派遣するという意義にそった活用がある一方、理科の授業そのものや工作づくりの指導者としての依頼があり、派遣内容を精選することが課題となっている。

移動博物館では、当館になかなか来館することのできない地域や施設の人々のために、各所に出向き当館の資料を展示している。この事業には、図書館や公民館などで開催する「社会教育施設移動博物館」と、県内学校で開催する「学校移動博物館スクールミュージアム号」がある。社会教育施設移動博物館は、県北部や東部などの遠隔地域、東日本大震災で被害を受けた地域を優先的に、年間8回程度開催している。2014年度には、県北部にある茨城県天心記念五浦美術館で開催された所蔵品展「富士山と筑波山」にあわせ、同館で富士山と筑波山に関する移動博物館を行った。また、茨城県立図書館では1年に2回、「サテライトミュージアム」と題し、当館で行われた企画展の縮小版を展示している。学校移動博物館は、年度初めに県内の各学校に広報

し開催希望校を募集している。そして、特別支援学校や遠隔地の学校を優先的に、8校程度開催している。展示内容については、「身近な自然」をテーマとしているが、各学校の希望により、理科の学習内容に沿った展示を行っている。これらの事業は各開催場所で好評であるが、設営・撤収・体験活動を行う博物館職員への負担が大きく、開催回数と職員負担のバランスをとっていくことが課題である。

前述のように、各事業には課題があるが、外部からのニーズは非常に高い状況である。課題を解決しつつアウトリーチ事業をさらに充実させていくことにより、今後も地域の教育力活性化の核となる博物館を目指していきたい。



博物館所蔵ボーリング標本を用いた学校向け貸し出し教材の開発・運用による地学教育支援

大阪市立自然史博物館 石井 陽子

地面の下の地層や岩石を機械でくりぬいて調べる地質調査の方法がボーリング調査であり、その時に得られる柱状の地層や岩石の標本が、ボーリング標本（ボーリングコア）である。自然史系博物館にとって、ボーリング標本は地域の生い立ちを明らかにする上で重要な資料である。しかしながら地層は大きなスケールを持つため、その一部分を取り出したものであるボーリング標本だけで地層の全体像をイメージすることは難しく、展示に適した標本とはいえない。大阪市立自然史博物館では、大阪市内の公共施設の建設工事ともなう地盤調査のボーリング標本を継続的に収集し、その数は4000地点以上に及ぶ。それらはこれまで主に学芸員の研究対象であり、普及教育や展示での活用はごく一部であった。

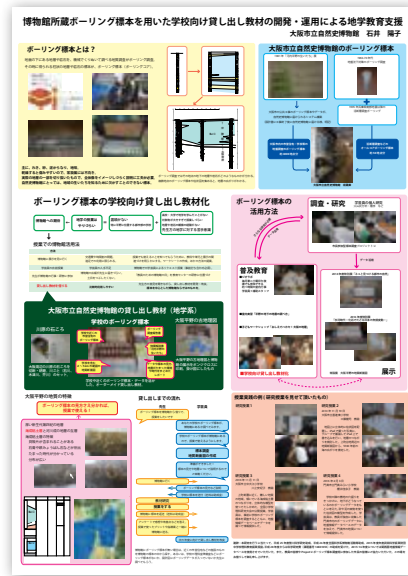
近年、小中学校の指導要領において、理科の学習で児童の実感を伴った理解を図るために博物館施設との連携や活

用が勧められている。一方、教員の多くが地層の単元の授業に苦手意識を持っており、博物館学芸員に対しては出前授業による支援が期待されている。しかし大都市においては学校数に対し学芸員の数が絶対的に不足しており、出前授業を広く行う事は現実的ではない。また、博物館の展示を授業で活用するには、時間割の工夫や交通費の工面が必要であり実現が難しい。そこで当館では収蔵ボーリング標本を貸し出し教材として活用することで、地学分野についての教員の支援を行っている。支援を希望する大阪市内の学校の教員に対して、その学校の建設時に掘削されたボーリング標本を貸し出すだけでなく、ボーリング標本の見方や学校がある場所の地層から分かる過去の環境変遷についても情報提供している。大阪平野は縄文時代に海域となり、当時の海の底にたまった地層が広く分布している。この地層に含

まれる貝殻片をボーリング標本で見いだすことにより、子ども達が自分たちが暮らす地域がかつて海であったことを実感を持って理解できると好評である。

小学校を対象にボーリング標本の貸し出しを数年間続けた結果、複数名の教員が6年生を担任すると必ず貸し出しを希望するようになった。さらに、1mを超える長さの柱状図を作って紙筒に巻き、それらを地図上に立てて地層のつながりを立体的に考えるなど、独自の展開の授業や教材を開発して公開授業を行う教員も出てきた。博物館学芸員や教育スタッフが考案した教材が定着するには、実際にそれを使用した教員に改善点を挙げてもらう、あるいはもっと効果的な活用方法を見出して広めてもらうことが必要である。博物館が博学連携において地域の核となるには、学芸員や教育スタッフによる教材開発や情報発信に加え、連携を通じて多くの教員に

博物館の理解者となってもらうことが欠かせないと考える。

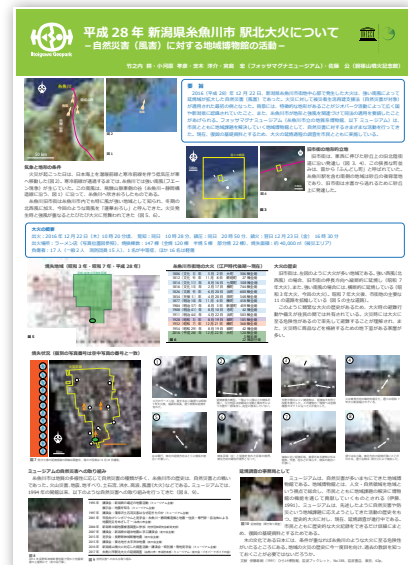


平成 28 年新潟県糸魚川市駅北大火について -自然災害(風害) に対する地域博物館の活動-

フォッサマグナミュージアム 竹之内 耕・小川原 孝彦・茨木 洋介・宮島 宏 磐梯山噴火記念館 佐藤 公

平成 28 (2016) 年 12 月 22 日、新潟県糸魚川市街地中心部で発生した大火は、強い南風によって延焼域が拡大した自然災害(風害)であった(焼損棟数 147、被災面積 40,000m²)。①日本海上を移動した低気圧(南風の原因)と②糸魚川-静岡構造線(以下、糸静線)に沿い発達する低地帯(大きな谷地形)が強い南風を糸魚川へ運び込み、③東西に伸びる砂丘上に発達した旧市街地の一部を焼失させた。火災に対して被災者生活再建支援法(自然災害が対象)が適用された最初の例となった。背景には、特徴的な地形があることがジオパーク活動によって広く国や新潟県に認識されていたこと、また、糸魚川市が地形と強風を関連づけて同法の適用を要請したことがあげられる。平成 6 (1994) 年に開館したフォッサマグナミュージアム(糸魚川市立の地質系博物館、以下 ミュージアム)は、自然災害が多いまちにできた地域博物館であり、自然災害に対する講演会、展示会、見学会、調査などを行い、地域の生い立ちを学び防災に活かす活動に取り組んできた。糸魚川市は、古生代から新生代に至るさまざまな環境下で形成された地層や岩石からなり、地質の豊富さに起因する地震・火山・土石流・地すべり・洪水など自然災害の種類が多い。糸魚川の人々の暮らしの歴史は、自然災害との戦いと言っても過言ではない。糸魚川市街は大火の歴史をもち、今回は 19 世紀初頭から数えて 14 回目の大火であったが、

今まで風害という認識は希薄であった。今回の大火が契機となって、ミュージアム友の会あるいは地域の公民館とともに行われてきた大地の生い立ちや自然災害を学び知る活動は、地形と強風、大火の歴史との因果関係を、私たち著者らをはじめ市民に新たに気づかせることになった。また、大火の歴史はあるが、大火の様子を克明に記録された資料がないこともわかってきた。現在、大火からの復興の基礎資料とし、また、歴史的大火の記録を後世に残すため、延焼過程の調査をミュージアム友の会、ジオパークガイドなどの市民とともに実施している。市民から支持される地域博



博物館になるためには、地域の課題に市民とともに取り組み、成果を公開していくことが重要と考えている。

地域の核として信頼されるために：行動規範を館の活動に活かすポイント

大阪市立自然史博物館 佐久間 大輔

「博物館への理解形成」が注目されている。残念ながら現在の日本社会においては、市民、経済界、政界ともに十分な「博物館への理解」を築くことができてはいないようだ。もちろん現場の日々のあらゆる活動は周辺への理解形成につながるものだが、日々の働いている姿を見せていくことだけでは必ずしも十分だとは言えない現状にあるだろう。第一に、博物館とはどのような存在なのか、どのような原理で動いているのか、第二に博物館は何を目指しているのか、を言語化していく必要がある。博物館界全体としては前者が「博物館の原則・博物館関係者の行動規範」(エチックス、倫理)であり、後者は各博物館のつくる「使命書」(ミッション)や「中期計画」で示されるべきものである。

科学系博物館は博物館への無理解だけでなく、現代社会に広がる「科学への不信」、「科学者への距離感」という難題を抱える。さらに公立館に関して言えば、「公務員バッシング」もいまだに根強い。我々はこうした障害を乗り越えて地域からの信頼を勝ち取り、地域の文化的活動の核となっていく必要がある。このために、各博物館で、自分たちの個々の標本収集や研究活動や教育普及活動、市民との連携は何を大事にして、どういう責任において為されているのか、今一度言語化してみるべきではないだろうか。皆が判っている(と思っている)ことを具体的に言葉にすることは案外難しい、そして大切な一歩である。

大阪市立自然史博物館では2016年春に「大阪市立自然史博物館の運営に携わるものの行動規範」を策定、公表した。これは、日本博物館協会による「博物館関係者の行動規範」を下敷きとして、当館に当てはめて検討したものである。前文にあるように、ICOMNATHISTの「自然史博物館のための倫理規定」(本紙 Vol.45 (5) 参照)なども参照しながら議論し、シンプルにまとめたものである。(http://www.mus-nh.city.osaka.jp/2/about/code/fuseiboshi.html)

こうした行動規範や使命書を博物館現場で議論・作成する意義は3つある。1つ目は前述のように職員間で意識を共有するために言語化すること。共有という意味では管理職だ

けが、あるいは現場だけで話すべきではないだろう。2つ目は上部組織や友の会やボランティアといった関連組織とのコミュニケーションのツールとして。実際大阪市は2016年秋に「大阪市ミュージアムビジョン」を公表したが、この議論には大阪市立自然史博物館の使命や行動規範は下敷きとして取り込まれている。3つ目が、社会へ博物館のあり方を示すという本来の目的である。博物館が社会へどういうまなざしを向けており、その方針に共感を得ることが、つまりは社会の核として博物館が働ける基礎条件となる。外部組織との連携の時に、寄付や寄贈の際に、そしてボランティアとしての協力を得る時に、職員とパートナーがこうした使命や行動規範を共有できる状況は理想的とも言える。

しかし、行動規範を作っただけでは状況はそれほど改善しないだろう。企業が投資家に、政治家が支持者に行うのと同様に博物館も活動報告の努力をするべきではないだろうか。自然史博物館は多くのユーザーに支えているという自覚から、認定特定非営利活動法人 大阪自然史センターとともに2014年から毎春に「活動報告会」を開催するようになり、もう4回目となった。こうした活動の積み重ねが博物館を語る言葉を豊かにし、博物館のあり方を皆で共有しながら未来を語れるようになればと願う。

地域の核として信頼されるために：行動規範を館の活動に活かすポイント
佐久間大輔 (大阪市立自然史博物館)

潮流として

- ICOMNATHIST 自然史博物館のための倫理規定
- 博物館の原則・博物館の行動規範
- 研究不正に対する取り組み強化
研究データの偽造・捏造に際する標準的な対応策を明確化する

博物館現場での普賢

- 科学者への視線
科学研究者(志願する)学芸員の原則への信頼感が低い
- お役所バッシング
公立博物館も研究活動は仕事からしないの？ サービスが足りないものはないか？
- 博物館活動への理解
何が目的で活動している機関なのか、理解されていない
なかなか活動が活動しているのか不信感を持たれている
何かに比べて学芸員の仕事は別に何が期待されるのか？

誰に対して

- 上位組織とのコミュニケーション
- 博物館活動を理解してもらうためのツール
- 博物館の職員・関係者がコンセンサスを作るためのツール
- 博物館の周りに理解者を作るためのツール

活動の目的・ミッションで議論
活動の優先順位を決めるもの

相補的関係

活動の手続き(判断基準)→行動規範
科学研究者や研究データは以上の下に集まるべきもの

使命書

研究の基礎、目的達成に近づいているのか
現場の使命が固まれば上位の計画にも影響

行動規範

ファンドライズの基礎にも
たがらぬ厳格化でなく、何のためか、という判断基準
関係者の指導基準

webへの掲載
活動報告会でユーザーに直接伝える
→ 博物館学的な普及行事
コンセンサス形成にコミュニティを巻き込む(一緒に対話)
いろいろな仕様書にも反映

波及効果 友の会も経営陣もミッション自覚化
社会に対してどう動く？
その原資や稼ぎ方は？

【今後の課題】来館者どう示すか
ボランティアどうやって共有するか



■ 新設館

米テネシー州に、炭坑博物館が開館

米国南部のテネシー州のロッキートップは人口が僅か約1,800人(2010年調査)の小さな町であるが、アメリカの炭鉱事故の歴史に残るフレータヴィル炭鉱爆発事故が1902年5月19日に起きた場所として知られている。約216人が坑内で起きたガス爆発により生き埋めになり、遺体が地上に回収されないまま、全員死亡として記録に残された。この痛ましい事故を後世に伝える目的で、コールクリーク炭鉱夫の博物館(Coal Creek Miners Museum)が、フレータヴィル炭鉱爆発事故の115周年記念として2017年3月17日に開館した。

Coal Creek Miners Museum, Rocky Top, Tennessee.

<http://www.coalcreekminersmuseum.com>

米テキサス州に、科学技術博物館が開館

オースティンは、米国テキサス州の州都であり、州内の都市圏人口(2016年調査:約200万人)ではダラス、ヒューストン、サンアントニオに次ぐ規模を誇る。また全米第2位のハイテク都市であり、多くの技術系企業が集まっているところとしても知られている。このオースティンに、プラネタリウムを併設した新しい科学館「テキサス科学技術博物館」が、2017年3月20日に開館した。同館は、科学、技術、工学(エンジニアリング)、そして数学をテーマにした展示活動を展開し、また関連の実物資料をも積極的に収集していくようだ。延べ面積:約2,800㎡。

Texas Museum of Science & Technology, Austin, Texas.

<https://txmost.org/>

■ 企画展・特別展

深刻化する台湾の大気汚染展が、台湾の国立自然科学博物館で開催

台湾(中華民国台湾省・中華人民共和国台湾省)は、年々都市部だけでなく全島で大気汚染がひどくなってきている。特に冬を迎える11月になると、大気中の「PM2.5」の量が急速に増える。現地からの報道によると、都市部で測定した大気中のPM2.5の約30%は中国大陸から飛来したものだそうで、その量は70%になることもあるそうだ。

台湾の省都(中華民国にとっては首都)である台中市に

ある国立自然科学博物館では、PM2.5に汚染された台湾の現状を訴えた特別展が2017年1月11日に始まった。会期は、2017年6月11日まで。

島嶼浮塵-PM2.5視界特展. The Island of Floating Smog: PM2.5 Visual World.

国立自然科学博物館, 台中市.

<http://pm2.5.ebuznz.com/>

光害展が、スペインの科学館で開催

平成10年3月わが国の環境庁(現環境省)は、不適切な照明による天体観測、動植物の生育などへの影響を防止し、良好な照明環境(望ましい光の環境)の実現を図り、地球温暖化防止等を目的とした「光害対策ガイドライン」を策定した。そして、光害を「良好な照明環境の形成が、漏れ光によって阻害されている状況又はそれによる悪影響」と定義している。

この光害をテーマにした特別展が、スペインのバレンシアにフェリペ王子科学博物館(2000年11月開館)で、2014年12月19日から2015年6月30日まで開催された。同展では、光害のさまざまな例を紹介しながら、ひとの健康に与える悪影響をはじめ、生物多様性への影響、不必要なエネルギーの供給と消費などの問題を紹介した。同展は、もともとスペインのムルシア科学と水の博物館が、地元のムルシア大学等の協力を得て、企画され、2014年3月13日から12月14日まで開催された。

Light Pollution. The dark side of light.

Sciences Museum Príncipe Felipe, Valencia.

<http://www.cac.es/es/home.html>

バルト海に棲む生物展が、エストニア国立自然史博物館で開催

エストニアの首都タリンにあるエストニア国立自然史博物館で、エストニアが接するバルト海に棲む生物を紹介した企画展が開催されている。同展は、バルト海の生物多様性と人間社会との関係にもスポットを当てている。会期:2017年1月20日~2018年3月4日。

Our Baltic Sea.

Estonian Museum of Natural History, Tallinn.

<http://www.loodusmuuseum.ee/>

英ウェールズの炭坑写真展が、ベルギーの炭坑博物館で開催

イギリスのウェールズ地方の炭鉱地帯はしばしば写真家の強い関心を引いてきた。水俣を写したW. ユージン・スマスは1950年にウェールズを訪れ、炭鉱で働く鉱夫とその家族の日常生活を写し、後に彼の代表作となるモノクロ写真を残した。また84歳の今も現役の写真家として活躍しているブルース・デビッドソン（1933年生まれ）は1965年にウェールズを訪れ、スマスと同じように炭鉱で働く鉱夫とその家族の日常生活を写している。

写真家の関心を引くウェールズの炭坑地帯であるが、イギリスと同様に石炭を産出しているベルギーで、ウェールズの炭坑地帯で働く鉱夫と家族を写した写真展が炭坑の町ベリンゲンの炭坑博物館で、2016年4月1日から2017年5月29日まで開催された。出品作品は、ベルギーの写真家カール・ウイターハーゲン（1944年生まれ）が、1979年と1980年にウェールズ南部を訪れた時に写したものだ。

Coal in Wales.

Mine Museum, Beringen.

<http://www.mijnmuseum.be/en/>

Carl Uytterhaegen

<http://www.coalface.be/nl/photography/portfolio/carl-uytterhaegen-2/>

金採掘にともなう健康被害展（写真展）が、南アフリカで開催

南アフリカ共和国は、世界の金産出国では第5位だが、1994年4月に黒人政権が選挙によって誕生するまで、約100年にわたって、金産出国のトップだった。「金を産出する国」のキーワードで知られている南アフリカだが、その光の影に、金採掘に携わった無数の鉱夫とその家族の悲哀があったことは、南アフリカはもとより、諸外国でもその健康への被害の実態が知られていない。とりわけ金採掘にともなう遊離結晶性シリカの塵の吸入により発症するケイ肺症と結核の被害の実態はあまり知られていない。

海事博物館や美術館、歴史博物館等からなる南アフリカの国立博物館機構（IZKO）の傘下にある黒人奴隷歴史博物館（所在地：ケープタウン）で、金採掘にともなうケイ肺症と結核の深刻な被害の実態をカメラで記録した写真展「金の価値（The Price of Gold）」が、2014年10月12日から2015年2月29日まで開催された。作品を制作し、展覧会を企画したのは、ケープタウン在住の写真家トム・ピアスだ。ピアスは、20年にわたって南アフリカ各地で今も金採

掘の操業を続けている金鉱山に関わった人々を写してきた。The Price of Gold.

Iziko Slave Lodge, Cape Town.

<http://www.iziko.org.za/news/entry/the-price-of-gold-an-exhibition-of-photographs-by-thom-pierce>

<http://thompierce.com/tpog/>

■ 常設展

入門家づくり展が、サスカチュワン科学館でオープン

カナダのサスカチュワン州の州都レジヤイナにあるサスカチュワン科学館で、家づくりをテーマにした常設展示が2015年10月21日にオープンした。主に小学校高学年の子どもが観覧対象となっている同展では、家づくりに必要な設計の基礎、レンガの積みかた、電気を引くための知識、近所の家のデザインとの調和などが、わかりやすく学べるようになっている。

Building Connections.

Saskatchewan Science Centre, Regina.

<http://globalnews.ca/news/2291137/science-centre-highlights-building-in-new-permanent-exhibit/>

<http://cjme.com/article/256145/new-saskatchewan-science-centre-exhibit-building-connections-debuts>

<http://www.cbc.ca/news/canada/saskatchewan/kids-explore-science-behind-building-homes-at-science-centre-1.3282472>

ロンドン科学博物館で、時計の常設展示コーナーがオープン

ロンドン科学博物館で、時計の常設展示コーナーが、2015年10月9日にオープンした。このコーナーで紹介している時計は、いずれも1631年創業のロンドンの時計メーカー「ウォーシップフル時計店」（Worshipful Company of Clockmakers）が集めてきた時計のコレクションで、2014年10月まで同社が運営していた時計づくりの博物館（Clockmakers' Museum）で展示されていたものだ。同社は、より多くの人に見てもらうために、1,000点の腕時計、80点の柱時計、25点の海洋クロノメーターや無数の日時計からなるコレクションをロンドン科学博物館に寄託して、その一部を展示することになった。展示コーナーも元の名前をそのまま使っている。

The Clockmakers' Museum.

Science Museum, London.

http://www.sciencemuseum.org.uk/visitmuseum/Plan_your_visit/exhibitions/clockmakers-museum

7月8月の特別展等

開催館	展覧会名	開催期間
旭川市科学館	コロックルの夏休み	7月27日～8月20日
釧路市こども遊学館	夏休みイベント	7月22日～8月16日
盛岡市子ども科学館	2017年度特別展「昆虫ワールド」	7月26日～8月20日
仙台市天文台	野草園×天文台 コラボ企画展「四季のきらめき」	6月13日～7月14日
	はらだかおる 宇宙物語IX ～そらものがたり～	7月15日～8月31日
山形県立博物館	特別展「森の妖精 -不思議な生き物、粘菌-」	6月10日～8月27日
郡山市ふれあい科学館	ホワイエ企画展「天の川探訪」	7月1日～8月27日
	スペースパーク企画展「3Dゴーストハウスの科学」	7月15日～8月24日
産業技術総合研究所 地質標本館	地質標本館夏の特別展 「魅惑の鉱物 -北川隆司コレクションと青柳・今吉標本-」	7月11日～10月1日
	地質標本館特別講演会「鉱物(題名未定)」	7月22日
	化石クリーニング教室	8月25日
	地球何でも相談日	8月26日
那須塩原市那須野が原博物館	特別展「大恐竜展II -トリケラトプスとアジアの超肉食恐竜-」	7月8日～9月24日
群馬県立自然史博物館	第54回企画展「アマゾンはいま」	7月15日～9月3日
埼玉県立自然の博物館	企画展「埼玉生きもの情報～最新レッドデータブックの世界～」	7月1日～8月31日
千葉市科学館	夏の特別展「昆虫展2017」(仮)	7月15日～9月3日
千葉県立中央博物館	「-こどもも楽しい- きのこワンダーランド」	7月22日～9月10日
国立科学博物館	深海2017～最深研究でせまる“生命”と“地球”～	7月11日～10月1日
科学技術館	「青少年のための科学の祭典」2017全国大会	7月29日～7月30日
	夏休み特別展「マスレチック・ランド～さわれる! あそべる! 算数・数学展～」	8月5日～8月27日
郵政博物館	夏休みイベント「かみさまみならい ヒミツのここたま展」	7月1日～9月1日
府中市郷土の森博物館	特別展 あしもとネイチャーワールド「オレたち夏のキラ(KILLER)われ者」	7月22日～9月3日
東京農工大学科学博物館	企画展「ヒトとロボット、未来のカタチ 測る・調べる・動かす展」	5月27日～9月9日
多摩六都科学館	パズル島へようこそ! ～解ける? 解けない? パズルの不思議～(夏の特別企画展)	7月15日～9月3日
三菱みなとみらい技術館	楽しいテーマがいっぱい! 三菱みなとみらい技術館で《自由研究》	7月16日～8月20日
	夏のサイエンスフェスティバル	7月29日・30日
はまぎんこども宇宙科学館	夏休み特別企画「自由研究ワークショップ・フェスティバル」	7月22日～8月31日
横須賀市自然・人文博物館	企画展示「実物のない展示会～自然科学と二次資料～」	7月15日～11月5日
上越科学館	夏期特別展「カラクリ人形ととびだす絵本のワンダーランド」	7月15日～8月27日
富山県 立山カルデラ砂防博物館	土砂災害防止月間特別展「地震と土砂災害」	6月3日～7月17日
	企画展「黎明期の富山の土木 -高田雪太郎史料から-」	7月22日～9月24日
	サイエンスショー2017	8月5日・6日
富山市科学博物館	平成28年度富山県科学展覧会入賞作品展 -アイデア浮かぶ科学の広場-	6月10日～7月9日
	特別展「不思議まるわかり! 空気があるから」	7月15日～9月3日
福井県立恐竜博物館	「恐竜の卵～恐竜誕生に秘められた謎～」	7月14日～10月15日
佐久市子ども未来館	企画展「ちょっと未来の道具箱展 -さあ、なにつくる?-」	7月15日～9月3日

開催館	展覧会名	開催期間
飯田市美術博物館	企画展「世界最南端のライチョウがすむ南アルプス」	7月15日～12月24日
岐阜市科学館	特別展「世界の恐竜ワールド2017」	7月28日～8月31日
大垣市スイトピアセンター 学習館	カガクのとびら 透明な「やど」のやどかり	4月1日～9月18日
	ふるさとの自然展	5月3日～2018年3月12日
	企画展 PLAY! WATER(S)-プレイ! ウォーターズ-	7月15日～9月18日
	第4回 ふるさとの自然フォトコンテスト	7月22日～8月31日
中津川市鉱物博物館	第21回企画展「あおい鉱物・みどりの石」	7月22日～12月17日
ふじのくに地球環境史 ミュージアム	企画展「雲の伯爵 -富士山と向き合う阿部正直」	6月6日～8月13日
	企画展「掛川層群の化石展」	8月17日～10月1日
東海大学海洋科学博物館	特別展「釣(ちょ)～水族館」	7月8日～10月29日
	ふれてみてサメと海の生きものタッチプール	7月29日～8月27日
	ナイトアクアリウム	8月11日～8月20日・ 26日・27日
ディスカバリーパーク焼津	ディスカバリーパーク焼津20周年記念 夏の特別展「科学のお化け屋敷」	7月8日～8月27日
滋賀県立琵琶湖博物館	水族企画展示「大どじょう展 ～滋賀のドジョウ・日本のドジョウ～」	7月15日～9月3日
	企画展示「小さな淡水生物の素敵な旅」	7月15日～11月19日
神戸市立青少年科学館	夏の特別展「宇宙と人間」	7月8日～8月22日
阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター	夏休み防災未来学校2017	7月22日～8月31日
明石市立天文科学館	特別展「時計のある風景写真展」	6月9日～7月9日
	特別展「ノーベル賞を受賞した日本の科学者」	7月15日～9月3日
鳥取県立博物館	つばさの博覧会～巨大翼竜からペンギンまで～	7月15日～8月27日
島根県立三瓶自然館	SHIN昆虫展	7月15日～9月24日
倉敷市立自然史博物館	第26回特別展「チョウきれい! チョーたのしい! 昆虫展」	7月1日～9月10日
笠岡市立カブトガニ博物館	特別展示「ビーチコーミング! 笠岡の貝殻～海辺の宝探し～展」	7月20日～10月1日
広島市こども文化科学館	企画展「魅惑のオートマタ展～ゆかいなからくり人形の世界～」	7月21日～9月3日
広島市健康づくりセンター 健康科学館	企画展「“足”で考える“健康”～筋力UPでからだづくり～」	3月18日～7月17日
	特別展「それ行け! からだ探検隊～あそんでからだのナゾをとけ～」	7月22日～8月27日
	企画展「それ行け! からだ探検隊～あそんでからだのナゾをとけ～」	7月22日～11月12日
広島市江波山気象館	企画展「ゆらっ! ゆさっ! ぐらっ! ゆれるの科学」(仮称)	7月29日～8月27日
広島市交通科学館	夏季企画展「のりもののおべんとう～燃料とエネルギー」	7月14日～9月3日
防府市青少年科学館	夏休み特別企画「サイエンスアカデミー2017」	7月15日～7月30日
	企画展「世にも不思議な映像の世界」	8月4日～9月3日
徳島県立博物館	平成29年度企画展「ザ・モンスター～海と陸のへんてこ生物たち～」	7月22日～9月10日
徳島県立あすたむらんど 子ども科学館	第37回企画展「デジタルアート展」	7月15日～9月3日
面河山岳博物館	第51回特別展「巨大昆虫・微小昆虫」	7月21日～9月3日
愛媛県総合科学博物館	VRチャレンジスポーツ	7月8日～9月18日
北九州市立自然史・ 歴史博物館	夏の特別展「大昆虫博」	7月15日～9月3日
佐賀県立宇宙科学館	夏の特別企画展「夏祭りの科学」	7月15日～9月3日
宮崎県総合博物館	南極展	7月15日～9月3日

リニューアル情報

目黒寄生虫館

[更新箇所] 1階展示室 導入展示

[更新内容] 「寄生とは?」といった基礎的な事項を学ぶ導入にあたるパネルを、最新の知見を反映させた内容に改修しました。パネルの下にはタッチスクリーンを設置し、パネルに書かれた詳細な情報や解説を読むことができます。

[公開日] 平成29年3月29日

[準備期間] 平成28年4月～平成29年3月

[備考] この展示は一般財団法人全国科学博物館振興財団の平成28年度全国科学系博物館活動等助成事業による助成を受けたものです。



科学技術館

[更新箇所] ニュー・エレクトロホール<サイバー・リンク>3階D室

[更新内容] 「もう一つの身近な世界」としての情報世界を身近に感じてもらおうことをねらいとした展示室です。本展示室の更新は、2箇年度の計画で、その第一期となる「もの」と「情報」がつくる世界の公開です。「もの」と「情報」が深くつながった世界、「サイバー・フィジカル・ワールド」を印象付ける体験型のテーマ展示と、そうした世界をつくる基盤となる技術のあゆみを紹介します。

なお、第二期の更新分は2017年末に公開予定です。

[更新面積] 109㎡

[公開日] 平成29年3月29日

[担当者] 株式会社乃村工藝社



Panasonic

Core Products
Security
Communication
Office
Infrastructure
Terminal System
AVC Network

Total Solution
マーケティング・サービス
システムインテグレーション
設置・施工
保守メンテナンスサービス
クラウド・運用サービス

パナソニックだから、可能なソリューションがある。映像からシステムまで、パナソニックならではの技術力と製品力。多様化する現代のビジネスニーズに、トータルソリューションをお提案します。

apan

パナソニック システムソリューションズ ジャパン株式会社
おしごと応援レポート www.panasonic.com/jp/company/psj.html

— ご希望の恐竜・化石・動物・人類の標本及び模型を探しご案内いたします —

マラウイサウルス
ティタノサウルス科
全長—10m

株式会社 ゼネラルサイエンス コーポレーション
〒170-0005 東京都豊島区南大塚3-11-8
TEL:03-5927-8356 / FAX:03-5927-8357
e-mail: gsc@shibayama.co.jp
<http://www.shibayama.co.jp>

白浜エネルギーランド

[更新箇所] 『Da 迷路～エネルギー博士からのSOS～』

オープン!

[更新内容] オリジナルキャラクターの「エネルギー博士」と「エネゴン」が登場する、研究所をイメージした巨大迷路が新登場しました。

エネルギー博士の研究所で謎の液体を飲んだエネゴンが、いたずら大好きなワルゴンになってしまい、博士を閉じ込めて、研究所を迷路にしてしまいます。

実験室や発電の部屋などエネルギーに関する仕掛けがある迷路内でワルゴンをエネゴンに戻すためのアイテム(スタンプ)を探し出し、閉じ込められた博士を助け出す、遊びながら科学をより身近に体験して頂ける迷路となっています。

[更新面積] 300㎡

[公開日] 平成29年7月15日

[準備期間] 平成28年11月～平成29年6月



包み込まれるような映像体験。

Media Globe Σ

「Media Globe Σ 」は、最新の家庭用4Kテレビの、更に約4倍の高精細映像をお楽しみいただける、「8K」の投映解像度を持つ最新プロジェクタを搭載し、コニカミノルタの持つ先進の光学技術との融合により、高精細・高臨場感溢れる映像を、スクリーン全天に映し出します。

コニカミノルタプラネタリウム株式会社 <http://www.konicaminolta.jp/planetarium/>

NOMURA GROUP

世界に、歓びと感動を

株式会社 **乃村工藝社**
本社 東京都港区台場2-3-4 TEL: 03-5962-1171 (代表)



第11回 福井市自然史博物館 加藤 英行

福井一押し of 絶景スポット！



「屋上天文台からの眺め」写真撮影：特別館長 吉澤 康暢

福井市自然史博物館Webページ
<http://www.nature.museum.city.fukui.fukui.jp/>

当館は、1952年に戦災・震災からの復興のシンボルとして設けられた博物館です。膨大な郷土の自然史資料を収蔵し、それらを未来へ残す使命を持ちます。

また、福井市民いこいの森「足羽山(あすわやま)」の頂きにあるため、屋上天文台からは、眼下に福井市の街並みが広がり、遠く白山連峰まで見渡すことができる絶好の展望所でもあります。

屋上へは、開館時間であればどなたでも、登ることができますから、来福される際には、ぜひ福井の絶景を楽しみに、お立ち寄りください。



次回執筆者は、平塚市博物館 塚田 健さんです。

新規

巡回展示募集

加盟館がお持ちの資料、あるいは新規に製作する企画展示等について

巡回展事業へのご提供をお願い致します。

ご提供可能な展示がある場合、またご質問がありましたらメール等で事務局までご連絡ください。

皆様からのご連絡お待ちしております。

※なお本事業は、所有される資料をお譲りいただくものではありません。



全国科学博物館協議会

全科協ニュース編集委員

大島 光春(神奈川県立生命の星・地球博物館主任学芸員)
佐久間大輔(大阪市立自然史博物館学芸課長代理)
西田 雅美(公益財団法人日本科学技術振興財団
科学技術館運営部)
中井 紗織(国立研究開発法人科学技術振興機構
理数学習推進部能力伸長グループ)
畠山 泰英(株式会社キウイラボ代表取締役)
平濱美紀子(ディスカバリーパーク焼津天文担当係長)
船木 茂人(国立科学博物館博物館等連携推進センター
博物館連携室長)

全科協事務局

国立科学博物館
博物館等連携推進センター 博物館連携室
(担当:南部・江森・森永)
TEL 03-5814-9863 FAX 03-5814-9898
info@jcsm.jp
発行日 平成29年7月1日
発行 全国科学博物館協議会 ©
〒110-8718
台東区上野公園7-20 国立科学博物館内
印刷 株式会社セイコー社